

地図帳の怪(4)

——「陝西」省は「シャンシー」省か「シェンシー」省か——

明 木 茂 夫

一、はじめに

前稿(3)では、地図帳の地名のカタカナ現地音表記にまつわる文部省の手引き書、及びそれに続く各種手引き書について、その記述の細かい分析を試みた¹⁾。その際、『地名の呼び方と書き方』《社会科手引き書》²⁾(文部省著作、大阪教育図書発行、昭和三十四年、資料a³⁾)の書影として使用したのは、中京大図書館の所蔵本であった。その後、非常に興味深い文献なので自分でも手元に置いておきたいと、古書店に立ち寄るたびに注意して見ていたところ、幸いなことにこれを一冊入手することができた。前稿で掲げた本学図書館所蔵本と全く同じものである。

ところが、ばらばらとめくっていると、そこに一枚の黄ばんだ紙が挟まっているのに気づいた。何だろうと開いてみると、それはこの本

の寄贈者が寄贈先に宛てた手紙であった(図1)。その文面は以下のごとくである。

前略

文部省から社会科の手引き書として「地名の呼び方と書き方」が発行されました。

新しい教科書はこの書き方にそつことになっておりますので、編集もこれを参考に進めて行きたいと思っております。

御参考までに一部同封いたしました。

社会科編集部

まことに興味深い。これだから古本屋巡りはやめられない。

今は懐かしい謄写版、いわゆるガリ版刷りで、ここには特に宛名はなく、「前略」で始まっている。発送者が「社会科編集部」となっているからには、この「手引き書」を参考に進めるといふ「編集」とは、まさに社会科の教科書の編集のことを指すのである。簡潔な文面が

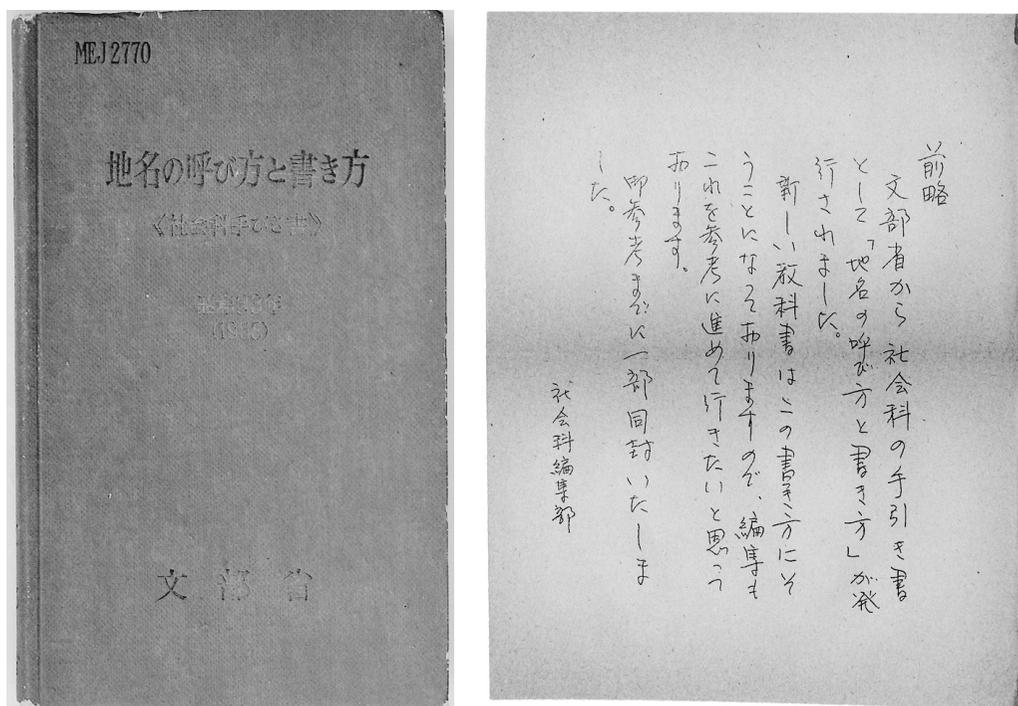


図1

らは、この手紙が社外の人に宛てられたのではなく、同じ社内別の部署、例えば国語など他の科目の編集部に宛てられたものであることを想像させる。もしかすると、この「手引き書」の発行を行った大阪教育図書の社内でもやりとりされたものかもしれない。ガリ版で印刷されているということは、一度にある程度の数を送付したのだろう。

やはり、このような形で外国の地名の書き方が変更されたことは、当時相当の驚きを以て迎えられたのであろうか。この手紙も、これからは「この書き方にそうことになった」と、わざわざ述べている。しかしその一方、実際の地図帳の上では、この手引き書が発行された年よりも前からカタカナ現地音が用いられていたことを、我々は既に見て知っている。そうすると、この手引き書もたらしたのは、それまでのカタカナの「書き方の統一」ということであって、これによって初めてカタカナがお目見えしたわけではないはずなのだ。殊に、社会科教科書の編集担当者がそれを知らないということはない。この辺りの細かい事情については、今後さらに丁寧に調査しなければならぬ。ともあれ本稿では、確かに公開された資料によって、まずは検証して行くしかないと考えている。

二、「敦煌」(シンホワン、トンホワン、トゥンホワン)について

さて前稿に引き続き、本稿では特に問題となる個別の地名表記を採り上げながら、それを通じてカタカナ現地音の問題点を洗い出して行

くことにする。まず「敦煌」を右上に載せてみたい。

敦煌は歴史的には重要な場所だが、行つて見ると意外と小さな町だ。小中学校用の地図帳には掲載されていない場合も多い。だが高等学校用にはおおむね掲載があるようだ。ここで問題とするはその表記で、「ツンホワン」「トンホワン」「トゥンホワン」と歴代揺れがある。もちろん注目すべきは「dun」のカタカナ表記である。

ではまず手始めに、外来語に用いられるこの「テイ」「トゥ」の表記について調べてみよう。新地名表記の手引¹⁾(教科書研究センター編著、ぎょうせい発行、平成六年)、即ち資料c 2(センター新版)の序文「地名表記の手引」改訂について³⁾に次のようにある。

その委員会(昭和三十三年文部省「地名の呼び方と書き方 社会科手びき書」の編集委員会を指すか・明木注)での問題点の一つは、テイ・ディをチ・ジとするかどうかであった。結論はチ・ジとすることになったが、言葉は「生きもの」であり、隔世の感がある。…(中略)…

今回の改訂作業の直接の契機となったのは、平成3年6月28日付け内閣告示第2号「外来語の表記」および同日付文部省初等中等教育局長通知「学校教育における外来語の取扱いについて」である。これは国際化に対応するため、外来語の仮名書きを改めたものである。

資料c 2による改訂を巡る一つのポイントが、この「テイ・ディ・トゥ・ドゥ」の表記だったようだ。「敦煌」の表記の揺れも、その一つの例だと考えられる。

ここで資料aからcに至る経緯を検討してみよう。a 2(文部省)に掲載されている中国語首節とカタカナ表記の対照表は「付録4」の「中国標準音の書き方」であり、これは昭和二十四年国語審議会建議の「中国地名・人名の書き方の表」⁴⁾を文部省調査普及局国語課で増補したものの抜粋である⁵⁾。この表の中では「テイ」「トゥ」がちゃんと用いられているのだが、a 2に掲載された表の前文²⁾には

地名の書き方にこれを準用する場合には、(中国音)の欄の「テイ」「トゥ」をそれぞれ「チ」「ツ」に書き換える。

と明記されているのである。a 2の「地名の書き方の例」「中国」でも、これに従って、

保定 パオチン
成都 チョンツー

などと、「チ」「ツ」が用いられている。一方、

天津 テンチン

は国語審議会の表から既に採用されている。「天」の字は中国語では「テイ、エン」のように発音するのに、地図では常に「テン」であるのを昔から不思議に思っていたのだが、なるほどi介音の音節にも先走つてこの原則を適応したためだったのだ。つまりここでは、中国語の「原音」よりも、仮名書きの規則の方が優先されていることになる。これに従えば、なるほど「敦煌 Dun huang」も「ツンホワン」となるわけだ。

では、a 2(文部省)は、国語審議会の表をなぜこだけ無視し敢えて「チ」「ツ」としたのか。これは明らかに国語審議会の「外

来語の表記」の方針に従ったためだと考えられる。つまり、国語審議会の「中国地名・人名の書き方」を、国語審議会の「外来語の表記」で修正したものである。⁷「外来語の表記」の「外来語表記の原則」に次のようにある。

- 9 原音における「トゥ」「トウ」の音は、「ト」「ト」⁸と書く。
11 原音における「テイ」「ティ」の音は、なるべく「チ」「ジ」と書く。

この点のみを地名に導入したのであろう。資料b²が、「発音通り」もしくは「外来語の表記」ということと、「現代仮名遣い」ということとを分けて考えていたのを思い起こす。つまり、発音通りなら「テイ」だが、ここは外来語表記の規則の方に合わせて「チ」とする、というわけである。

但し「トゥ」を「シ」と書くことになっている点に注目いただきたい。「外来語の表記」が「ト」となっているにも関わらず、である。「外来語の表記」が例に挙げているのは

セントルマン (gentleman) ブラントラスト (brain trust)
等の例である。但し「ト」は「例外」

ツープース (two piece) ツリー (tree)
ズック (doek) スロース (drawers)

が提示してあって、「シ」「ス」を例外として認めている。a²はこれらの例外を採用したわけだ。⁹これは考えるに、例えば「成都」のローマ字は「ch'eng tu」「cheng du」なの¹⁰、「せうと」に対して「ト」では似合わない。「シ」の方を採用した、「せう」となるのだ。¹¹「せや

私の勘ぐりすぎかもしれないのだが、しかし細かく調べてみるとこうした細かい変更には、その都度それなりの理由があるようなのである。もちろんそのこだわりが混乱を生んでいることは否定できないが、では、実際の地図ではどうだろう。大雑把に言うと、昭和三十年代初めは、

成都 チョントウー もしくは チョントー
敦煌 トンホワン
の表記が用いられていた。¹¹それが三十年代後半から、

成都 チョントウー
敦煌 ツンホワン トンホワン

となる。「敦煌」については、出版社により異なり、例えば帝国書院は「トンホワン」(途中一時的に「ツンホワン」が用いられるが)を、二宮書店は「ツンホワン」を、それぞれ採用している。この状態がしばらく続く。

ところが平成に入ってから、
成都 チョントウー
敦煌 トンホワン

を採用する地図帳が突然いくつか現れ始める(まだ全部ではないが)。この変化はどこから来たのか。恐らく資料c²(センター新版)の影響だろう。c²には「付表5」「地名の書き方 新旧対照表」が掲げられており、c¹から改められた表記を閲覧できるようにになっている。そこには、

旧 新

チヨンツウ チョントウー
 パオチン パオティン
 テンシャン テイエンシャン

なども含まれていて、「チ」「ツ」「ティ」「トウ」の改訂が反映されている。特に「ティエンシャン＝天山」は、「天^{tan}」というi音の音節にも「ティ」が適応されたことを示している。

そして、c 2が「付録2」に掲載する「中国地名漢字・ローマ字・かな対照表」は、基本的にはc 1が「付録2」に掲載する「中国地名・人名の書き方の表（便覧）」を改編したもののだが、ここでは右に見た「チ」「ツ」を「ティ」「トウ」とする改訂が加えられている。¹²

ではさらに、このc 2の改訂は、何に起因しているのか。これが平成三年の国語審議会答申¹³「外来語の表記」について¹⁴と、平成三年内閣告示第2号「外来語の表記」である。これについて、本稿に直接関係のある記述を見てもみることにする。答申「外来語の表記」について²「構成」に次のようにある。

(2) …「ティ、デイ」…(中略)…の仮名は、外来語や外国の地名・人名を書き表すのに一般的に用いるものとした。(ただし、従来…(中略)…「チ、ジ」…(中略)…と書く慣用のある場合は、それによる)

(注) 昭和29年の報告では…(中略)…「ティ、デイ」…(中略)…はなるべく…(中略)…「チ、ジ」…(中略)…

…と書くとしていた。
 (3) …「トウ、ドウ」…(中略)…等の仮名は、外来語や外国の地名・人名を原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いるものとした。

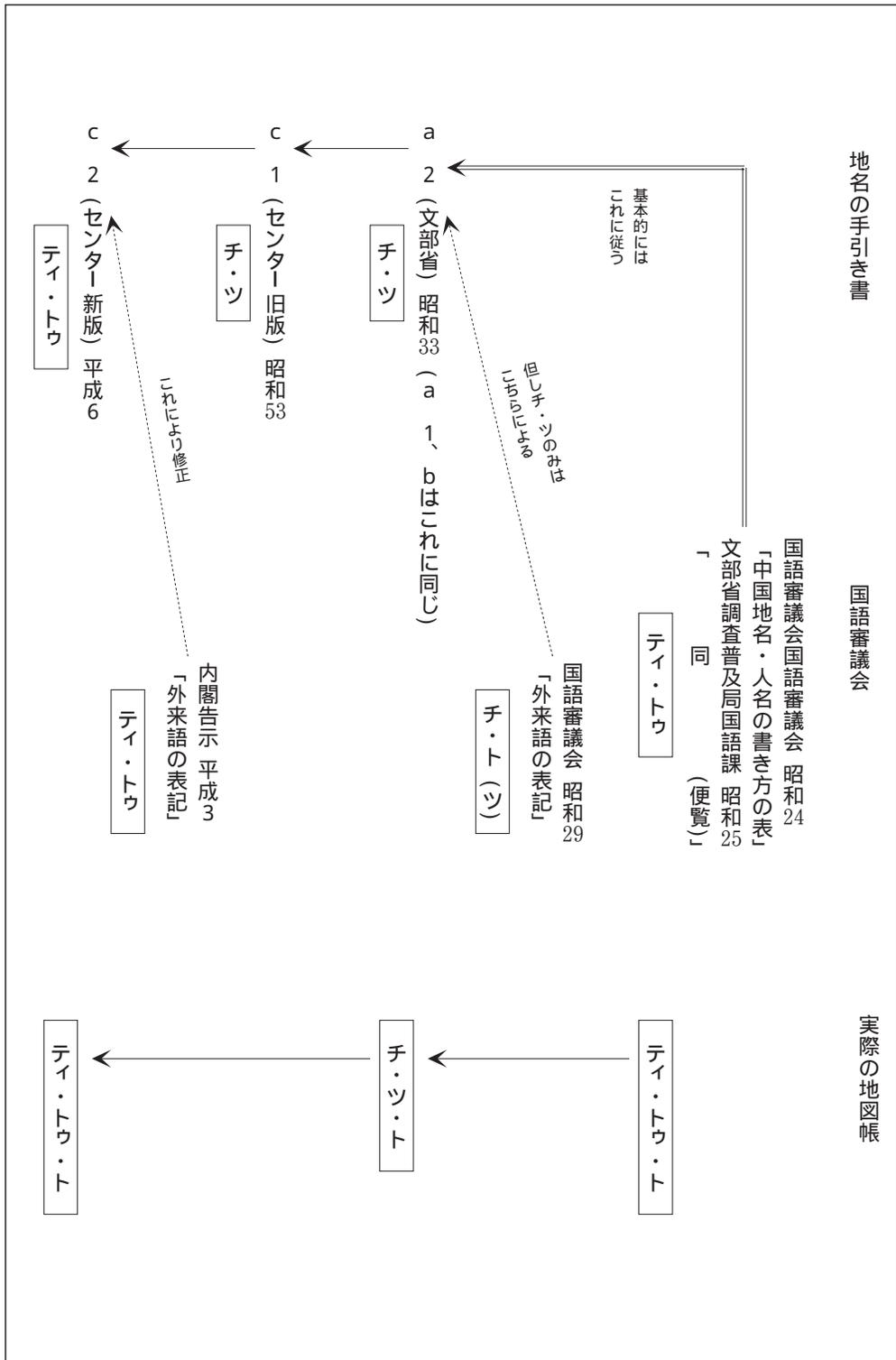
(注) 昭和29年の報告では…(中略)…「トウ、ドウ」…(中略)…はなるべく…(中略)…「ト、ド又はツ、ズ」…(中略)…と書くとしていた。

「原音」や「原つづり」と並べているところは相変わらずだが、これを要するに、古い昭和二十九年の「外来語の表記」と、新しい平成三年の「外来語の表記」では、前者が「ティ」「トウ」を認めていなかったのに対し、後者では「ティ」「トウ」を認めるようになった点が大きく変わったのである。そして内閣告示「外来語の表記」では、

の4 「ティ」「デイ」は、外来音ティ、デイに対応する仮名である。
 の6 「トウ」「ドウ」は、外来音トウ、ドウに対応する仮名である。

と明記されている。c 2(センター新版)の手引き書はまさにこれに従ったのである。¹⁵ やや煩雑になったので、一度流れを整理して図示してみた。次ページを参照されたい。

関連する答申や告示、そして社会情勢をその都度細かく正確に反映する、という地名の手引き書の改訂作業のご努力にはまことに頭が下がる。しかしながら、そのようにして歴代改変を繰り返してきたことが、地図表記の混乱、ひいては教育や社会の地名に関する混乱の原因



になっているとは言えないのだろうか。余計なことを考えずに現在の最新の表記だけを正しいものとして素直に受け入れよと叱られそうな気がするが、しかし現在だけが問題なのではない。既に見たように、その都度理由はあるにせよ、地図のカタカナ現地音表記は実にころころと変わっている。普通、人は自分が習った時の表記で覚えてしまつて、後にどう改訂されたかはよほどのことがないと追跡はしまい。すると、同じ地名なのに、世代によって習った呼び方が違つ、という非常に好ましくない状態になる恐れがあるのである。そしてそれは、入学試験や採用試験などに直接的な影響を与えかねない。この様子では、これから先も、地図帳のカタカナ現地音表記が直ちに安定するとはとても思えないのである。

三、「黒竜江」と「鴨緑江」について

次は、河川名を巡る問題。「黒竜江」、ロシア名「アムール川」だが、

- c 1 (センター旧版)
アムール「川」¹⁷⁾
- c 2 (センター新版)

ヘイロン川(黒竜江)(アムール川)¹⁸⁾

となっており、旧版ではアムール川のみだったものが、新版ではアムールがカッコに入り、ヘイロン川=黒竜江がメインに変わった。これは「はしがき」に言う「世界情勢」の変動に対応した結果なのであろうか。昔はアムール川と呼ばれていたが「情勢」の変化で黒竜江ヘイロンがわと呼ば

れるようになった、などと言ったらロシア側が怒らないものか？ カタカナ現地音の「ヘイロン川」が正式なものとされ、漢字もアムールもカッコ入り、というのは、出来るだけカタカナ現地音を優先しよう、せっかくなカタカナ地名を作ったのだからそちらで統一しよう、という意図から来たのではなからうか。

参考までに資料 a 2 (文部省) を見てみると、「アムール川」を表記として指示している。しかし問題は、これが「中国」の項目に掲載されていて、しかも原語の欄には「Amur R.」(黒竜江)と記されていることである。¹⁹⁾ 他の中国地名では原語の欄は漢字なのに、これだけは Amur を中国の原語として扱っているわけだ。どう考えても「Amur」は中国語ではあるまい。まあこうした混乱は、このカタカナ地名を巡っては実にしばしばみかけることではあるのだが。

もう一つ興味深いのが「鴨緑江」である。資料 a と c の表記を比較すると、

- a 2 (文部省) ヤール川²⁰⁾
- c 1 (センター旧版) アムノック「川」²¹⁾
- c 2 (センター新版) アムノク川(鴨緑江)²²⁾

となっている。少し細かく見てみよう。a 2 (文部省) の「ヤール川」が「付表1」「地名の書き方の例」の「朝鮮」の項目に置かれていることにご注意願いたい。「ヤール」というのは「鴨緑」の中国語発音「yǎnlǜ」のカタカナ表記、つまりこれは中国語の発音なのである。なのになぜか「朝鮮」の地名として扱われているわけである。先ほどの「黒竜江」もそうだったが、このような国境線を流れる河川

では、手引き書はその地域と言語とをこっちゃんにしているようなのである。c 1 (センター旧版) は、「アムノック川」と朝鮮語読みとなった。場所も「朝鮮」のページに置かれている。但しこれに対応する漢字名は、

鴨緑「江」

のように江をカッコ「」に入れていて、別扱いになっている。西洋の河川名と同じ扱いにしたかったのだろうが、「鴨緑江」を「鴨緑」と呼ぶことは実際あまりなさそうだ。c 2 (センター新版) はその読み方が「アムノク」に変更され、

アムノク川 (鴨緑江)

の表記となる。掲載場所も「韓国・北朝鮮の地名」である。資料 a b が共に「鴨緑江」「ヤール川、アムノック川、アムノク川」を朝鮮半島の地名として扱っていることが確認できた。

ここで歴代の地図帳上の表記も確認してみよう。昭和三十年代には、

ヤール (鴨緑) 川

ヤール (鴨緑) 川

の表記も見られた。それが、

ヤール川 (鴨緑江)

となり、しばらくはこれで落ち着く。それが帝国書院高等学校用では 50 (51) になって、

ヤール川 (アムノク川) (鴨緑江)

となる。手引き書の表記とシンクロしているようだが、この地図の方が手引き書の発行 (昭和53年) よりもやや前であるのが気になる。こ

の前に既にそういう動きがあったのだろう。面白いのは帝国書院標準 53 (54) で、

ヤール川 (アプログ川) (鴨緑江)

の表記が出現することだ。朝鮮語の発音に音声学的に近づけようとしたのだろうか。一方同社同時期の新詳 53 (54) では、

ヤール (アムノク) 川 (鴨緑江)

である。その後は、

アムノック川 (鴨緑江)

が現行のものまで用いられている。但し、中国東北部が拡大された地図ではヤール川の表記も見られる (以上、中学用もほぼ同様)。これを要するに、「アプログ」川という表記が一度だけ現れるものがあり、これは c の手引き書の「アムノック」「アムノク」という変化をたどって移と丁度逆になっている、ということである。いくら細かく規定を変えたところで、現実には結局混乱するということか、もしくは手引き書には実際の地図帳がそれほど従っていないということか。

他にも細かいことはいろいろあって、例えば同じ地図帳で同じ川がページによって「ヤール」「アムノック」と違っている場合、どこかでそれをきちんと説明しないと、これまた余計な混乱を来しはしないかと心配になる。それに、中国語音表記から朝鮮語音表記に変わったのも「世界情勢」の変動に対応した結果と言えるのかどうか、気になるところだ。

そもそも、「現地の発音」ということにはかなりこだわると、こっ

う混乱が起こるのである。特に国境線ではそつだ。しかしこうした地名には漢字の裏打ちがある。発音が違っても字を見れば分かる。これが漢字という文字がアジアの歴史に果たした重要な役割なのである。「あぶりよくかう(おつりよくかう)」「Ya Lu Jiang (ヤールーチヤン)」「Amnokkang (アムノックカン)」、これはいずれも「鴨緑江」という漢字の音読みである。一見、同じ漢字でも読み方が全く違つうに見えるのだが、実はこの三者には密接な関連がある。細かいことは省略するが、例えば「鴨」と「緑」が入声音の字であることが、日中朝の三言語の読み方に重要な役割を果たしているのである。特に朝鮮語のカタカナが複数あることも、この入声を含む語学的知識があればすんなり理解できることであろう(私は韓国・朝鮮語は専門外だから、もし間違っていたらお許し願いたい。地図帳のカタカナを作つた方々はもちろんご存じだったはずだ)。

私は大学の授業では、こういうことをネタに、漢字の面白さ、奥深さ、アジアの絆の役割を果たした漢字の意義を、ことあるごとに教えることにしている。地名というのは非常に面白い生きた教材となるのである。もちろん、これは小中高には難しすぎる。しかし大学に入つてから、漢字についてさらに広く深く学ぶには、小中高で「鴨緑江」という漢字を、覚えなくても読めなくても構わないから、とにかく目にしておくことが大切なのである。躍起になって漢字を排斥しても結局そろくなことはない。大学生にもなって初めて漢字を目にするようでは困るのだ。

漢字は難しいので子供の目に触れさせてもいかん、習っていない漢

字は子供に見せてはならん、と考える人がいるようだが、それはおかしい。漢字は18禁ではないのだ。地図に書いてあるのを目にしておくこと、それだけでも大切なことなのである。「処方せん」などもつての外。処方をせんのやったら、薬局など開くべきではない。堂々と「処方箋」と書いておいて、病院や薬局に行くたびに目にしておけばよい。書けなくても、見ていれればすぐに慣れてくる。それでよいのだと思つ。

四、「陝西」は「シャンシー」か「シェンシー」か

次に「陝西省」について調べてみる。地図帳ではなぜか、「シェンシー」省と表記されていることが多い。その「なぜか」というのは何か、以下順を追つて説明したい。中国語を専門となさらない読者の便を考えると、中国語学の用語を避けつつ、少しずつ噛み砕いて説明することにしたい。中国語を専門となさる読者には、説明や例証に不適當なところがあれば「批正を乞つ」。

ア、問題の所在

「陝西」に「シェンシー」というカタカナが表示されているのを見て、中国語のできる方ならば不思議に思われることだろう。「陝西」は中国語で「シェンシー」とは読まないのである。「陝西」の中国語発音は、

Shan xi

である。「xi」の綴りは中国語では「シ」と発音する。地図帳式カタカナ表記なら当然、

シャンシー

となるべきところである。しかし、現地の人を読む通りなど言いながら、それがなぜ地図帳の上だけは、

シエンシー

でなければならぬのだろう。

イ、歴代地図帳の表記

まず歴代地図帳における「陝西省」の表記について、極々大雑把に整理しておきたい。昭和二十年代から五十年代にかけて、多くの地図帳は、

シエンシー（陝西）

を採用していたようである。昭和二十年代に「陝」ではなく、略字の「陕」を使用している例がいくつか認められるが、他はほぼこの形である。ところが昭和五十八年頃になって、

シャンシー（陝西）

を採用するもの、或いは、

シャンシー（シエンシー）（陝西）

と、「シャンシー」「シエンシー」を併記するものが出てくる。恐らくこの辺りで中国語の発音が「シャンシー」に近いことに気づいたのであろう。その後、現行の地図帳では、漢字の「陝西」をカッコに入れるなどして小さく添えつつ、

「シャンシー」のみ、

「シャンシー」がメイン、「シエンシー」はカッコ入り

という二つの形に落ち着いたようだ。

また、「省」の付け方にもバリエーションがあつて、

シエンシー（陝西）

シエンシー（陝西）省

シャンシー（陝西）省

シャンシー（陝西省）

シャンシー（シエンシー）（陝西省）

シエンシー省（シャンシー）（陝西）

などの例が認められる。全体的には、カタカナ表記の場合には「省」をつけないことが多い。「山西省」を「シャンシー」とするなど、他の省も同様である。「川」「山」「湖」などにはこだわっていた地図帳だが、「省」だけはなぜか別扱いということが。

以上を要するに、カタカナ現地音表記導入の当初から、「陝西省」は「シエンシー」と表記され、後に「シャンシー」が導入され、現行では「シャンシー」のみ、もしくはこれに「シエンシー」をカッコ入りで添える、という形になっている。途中から「シャンシー」が入ってきた理由は、中国語の発音が「シエンシー」ではなく「シャンシー」であることに地図帳関係者が気づいたことにあると思われる。

ここで気になるのは、歴代一貫して「現地呼称」の通りということにこだわっている地図帳が、「陝西」のみにはなぜ「シエンシー」を採用し、しかも今に至るまで、カッコ内に補足する形で残そうとして

いるのか、ということなのである。そもそもこの表記のブレは何に起因するものなのだろう。そして「シェンシー」はなぜ一貫して標準の読み方であるかのことが扱われ、最近になって「シャンシー」にその座を受け渡したのだろう。

ウ、仮説「山西省と陝西省を区別するため」?

一つ仮説として考えられるのは、お隣の「山西省」との関係である。中国語の首節は「声調」を伴っている。同じ首節でもその上がり下がり、のトーンが区別される。例えば同じ「ア」でも、高く平らな「ā」と、上昇する「á」と、低く押さえ込んだ「ǎ」と、下降する「à」とが区別される。実は「山西」と「陝西」の読みの違いはその声調だけなのである。両者を声調符号のついたローマ字で表すと、

山西 Shān xī

陝西 Shǎn xī

となる。つまり両者の発音は同じ子音と母音から成っており、両者を区別するのはその上がり下がり、のトーンだけだ、ということなのである。

ところが英語など、西洋言語の中で中国語をローマ字表記する場合は、その声調符号を使わない。いや、使えないと言っべきだろうか。

よって「陝西」も「山西」も、

Shan xi

とこう同じ綴りになってしまっ。

また地図帳式のカタカナ現地音にした場合も同様で、声調を表記す

る手段がないために、「陝西」も「山西」も、

シャンシー

となり区別がつかない。そこで、

「陝西」は「シェンシー」

「山西」は「シャンシー」

と書いて区別できるようにしておくと、こういう事情が可能性として考えられるわけである。

しかし、区別をつけるために中国語の発音をねじ曲げる、というのもひどい話で、それこそ相手の国に対して「失礼」と言っべきだ。実は、「ウィキペディア」の「陝西省」の項目には、

英語などでは山西省と区別するため

Shaanxi Province と表記

と書いてあるのである。^(注)なるほど「Shanxi」では「山西」か「陝西」か分からないので、「陝」を「shaan」と書いておく、というわけである。

しかしここで注意しなければならないのは、「陝」を「shaan」と書くのは、綴りをそらすと「うだけ」のことで、発音をねじ曲げてはいない、ということである。この「aa」の部分は、実は声調を含んだ綴り方なのである。中国語の発音を表記する方法には複数あることは既に何度も触れた。その中に「国語羅馬字」^{ローマ字}式というローマ字表記法があつて、「うだけ」

an an

an an

an aan
an aan

のように書き分けるのである。このように書くメリットは、言うまでもなく、声調符号という新たな記号を使わずにすむということである。既存の英数字の活字だけで表記が可能だったわけだ。ただやはりこれは覚えにくい。残念ながら現在ではほとんど使われていない。

さて「陝」を「shan」と書いても「shan」と書いても、両者が表現する発音は同じであることは分かった。ところが「シエンシー」の場合は違う。こう書いてあれば日本人は当然「しえん」と読んでしまっただけで、明らかに発音をねじ曲げていることになる。どうも「山西」と「陝西」を区別するための便法、と言っにはあまりに強引である。そんな理由で原語の「シヤン」を「シエン」に変えてはならないはずだ。そもそも漢字で「山西」「陝西」と書いておけば何の問題もないのである。音読みは「さんせい」「せんせい」でちゃんと区別できる。それに先ほど触れたように、新しい地図帳では「シエンシー」を放棄して「シヤンシー」と書くものが現れてきているわけだし。

Ⅱ、資料 a 2では…

では、文部省や教科書研究センターから出ていたいわゆる「手引き書」ではどうなっているのだろう。資料 a 2では「付表1」「地名の書き方の例」「中国」に、

陝西 (Shensi) 省 シエンシー省

とある。⁽²⁷⁾なるほど、手引き書では当初から「シエンシー」となってい

たわけだ。ところが、同じ本の「付表4」「中国標準音の書き方」では、

陝 シヤン

となっているのである。⁽²⁸⁾もちろん、文部省の手引き書はこの矛盾を放置しているわけではない。本文第3「中国・朝鮮ならびに樺太・および千島の地名」の「細則2」に、

次の地名は、とくに慣用の呼び方による。
として、次の地名が挙げられている。⁽²⁹⁾

アモイ (廈門)	ウースン (吳淞)
カオルン (九龍)	カンシー (広西) 省
カントン (広東) 省	キールン (基隆)
シエンシー (陝西) 省	スワトウ (汕頭)
ナンキン (南京)	ペキン (北京)
マカオ (澳門)	ホンコン (香港)

つまり、音節表では「陝」は「シヤン」だが、「陝西省」の場合のみ慣例に従って「シエンシー」とする、と宣言しているわけだ。ここで疑問なのは、音節表の原則を無視するほどに、「シエンシー」は当時広く使われた慣用だったのか、ということだ。どうもそうは思えない。今に至るまで、「シエンシー」というのは地図帳の上でしか見たことがない。

そうして見ると、右の一覧表はどうも理解しがたい。「北京」は中国語標準音 (Beijing) によるカタカナ表記ならば「ペイチン」となるところだが、今までの慣例で「ペキン」とする、というのはよく分

サンメンシヤ〔ダム〕	Sanmenxia	三門峽
シー川	Xi Jiang	西江
シーアン	Xi'an	西安
シェンシー〔省〕	* Shensi	陝西 (チャーアンシー Shaanxi)
シェンヤン	Xianyang	咸陽
シェンヤン	Shenyang	瀋陽

図2

かる。我々はその町のことを常に「ペキン」と呼ぶ。「香港」も中国語標準音なら「シヤンカン」となるはずだが、慣例で「ホンコン」と呼ぶ。「アモイ(廈門)」「カントン(広東)」「キールン(基隆)」「スワトウ(汕頭)」「ナンキン(南京)」「マカオ(澳門)」はみなその慣用であろう。「ウースン(呉淞)」については微妙なところだが、「呉淞上陸作戦」などに関しては「ウースン」と読んでいたようなので、慣用と見なしてもよさそうだ。

一方「カンシー(広西)」「シェンシー(陝西)」については、これは「慣用」であろうか？ あれこれ見てみるに、基本的には昔も「広西省」「こうせいしょう」「陝西省」「せんせいしょう」だったようである。戦前の地名辞典、例えば『支那地名辞典』(星斌夫著、富山房昭和十六年)を見ると陝西省はやはり、

陝西省 センセイシヨウ

となっている。一方、広東省と広西省については、

広東省 カントンシヨウ

広西省 カンシシヨウ

となっている。戦前も「江西＝カンシイ」と読むことはあったらしい。いずれにせよここで手引き書が言う「慣用」には、異なる性質のものが混じり込んでいるように思えて仕方がない。「ペキン」は従来からみんな「ペキン」と呼んできた。しかし「シェンシー」は日本語の中では誰も使っていない呼び方である。「ペキン」とは性質が異なる。ではなぜこれが「慣用」なのだろうか。

オ、資料c 1では…

次に資料c 1(センター旧版)を見てみよう。図2をご覧ください。きたい。「付表1」「地名の書き方の例」の「7 中国(チュンクオ)」の項目に、

陝西

(チャーアンシー Shaanxi)

とわざわざカタカナが添えてあるのだ。わはは、何と「Shaanxi」をそのままローマ字読みしているのである！「これはひどい…。」「チャーアンシー」という別の読み方もあるんだらう、とお考えか？ 敢えて言おう。そんな読み方をする中国人は一人もいないと。恐らく、

Shaanxi

が、

Shaanxi

で切れると思ったから、

シャー アン シー

と書いただけなのである。いや、そうではないのである。先ほど指摘したように、「aun」は「an」と同じ音なのだ。「陝西」という二文字に対して三音節あることを、不思議に思わなかったのだろうか。こういう人にはぜひお尋ねしてみたい。では英語で、

wrong

と書いてあったらあなたは、

ウロング

と読むんですか？

right

と書いてあったら、

リグフト

と読むんですか？ それと同じことなのだ。なぜ中国語の専門家に相談しなかったのか。なぜ臆断して適当に読むのか。残念ながらやはり地図帳のカタカナを作った人の間には、このように「綴り（表記）」とそれが担う「音声（発音）」との区別がない人がいるようだ。

いや、笑っていいはならない。ここにも重要な情報が示されている。図2を見ると「*」印がついているのにお気づきだろう。これはこの「中国（チュンクオ）」の項目での注記であり、そこには、

* 印は慣用の英文による。

とある。そつなのだ、「」の手引き書を作った人はこの「Shensi」が

中国語の発音表記ではなく、英文の慣用表記であることを認識しておられるのである（もともと、厳密には必ずしも「英文」とは言えないのだろうが）。前出の昭和二十四年国語審議会建議「中国地名・人名の書き方の表」では「国際的慣用の呼び方」となっていた。それが資料 a 2 では（右で見たように）「国際的」が消え、単に「慣用の呼び方」になってしまった。ところが c 1 は、これが西洋の言語における綴り方であることを、きちんと理解しているというわけなのである。それなのに「シャーアンシー」というのはあまりに情けないが…。

他人のちよつとしたミスで、鬼の首でも取ったように上から目線でバカにしている、とどうぞ思わないでいただきたい。次に出された資料 c 2（センター新版）ではさすがにこの「シャーアンシー」は姿を消している。つまり「シャーアンシー」は一時的な小さなミスに過ぎないのである。c 2 の「付表1」「地名の書き方の例」の(3)「中国の地名」では、

シェンシー（シャンシー 陝西）省

に改められている⁽³²⁾。現在の地図帳の多くはこれに従っていると思われる。

ただ私が懸念するのは、このミスが象徴するような、語学的な知識を欠き、綴りと発音を混同するような誤りが、他の地名にも入り込んではいしなやかということなのである。これだけどころどころ変化している地図帳の表記が、現行のもので確定するとも思えない。これから細かく改変されるかもしれない。そこに再びこつした不純な要素が入り込みはしないかと思うと、どうも落ち着いていられない。

カ、西洋の地図では…
 さて、その「慣用の英文」（国際的慣用）ということを確認するため、ここで一度社会科地図帳から離れて、西洋の地図を見てみよう。
 西洋の世界地図の中国のページにおいては、もちろん漢字は使えない。現在、中国の地名は現行の「漢語拼音方案」、式ローマ字がそのまま使われることも多い。しかし昔から、西洋諸国で作られた世界地図では、それぞれの言語の綴りの特徴を活かした中国語ローマ字表記が、それぞれに使われていたのである。例えば英語圏ではウェード・ジャイルズ式（イギリス式）、フランスではヴィシエール式、ドイツではレッ

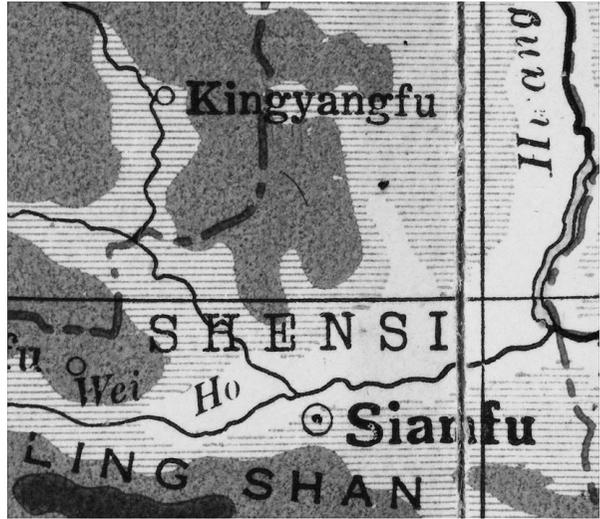


図 3



図 4



図5

シング・オットマー式 ロシアではキリル文字を使うカフアーロフ式
 という具合である。⁽³³⁾

図3は戦前アメリカの学校で使われていた学校用地図帳『Goode's
 school atlas : physical, political, and economic : for American
 schools and colleges』(一九三三)⁽³⁴⁾の例である。「陝西」のウイグル語
 SHENSI

となっている。また図4はドイツで出版された世界地図『Keyzers
 Grosser Weltatlas』(一九六二)⁽³⁵⁾である。「陝西」のウイグル語
 Schensi

となっている。「shen」が「schen」になっているのは、いかにもド
 イツ語式らしい。もちろんそれらが表す中国語の発音は同じものと
 考えてよい。図5はロシア語の地図『(一九六二)⁽³⁶⁾
 である。キリル文字で

と書いてあり、これは「SHENSI」に相当する(「」は口韻尾に当
 たる)。いずれも「陝西」が「Shensi」系統の綴りになっていること
 がお分かりだろう。

これで西欧の言語の中では、「陝西」に古くから「Shensi」系統の
 綴り方が用いられていたことが一応確認できた。さて次に気になるの
 は、それがなぜなのかと言ったことだ。

キ、古い漢英辞典では…

では、地図ではなく、辞書ではどうなっているのだらう。例えば漢

英(中英) 辞典・英漢(英中) 辞典など、現在も中国語を勉強する西洋人のための中国語辞典がたくさんある。もちろんそうした辞書は昔から作られている。そうした古典的中英辞典の例として、宣教師ロバート・モリソン(中国名:馬礼遜、一七八二—一八三四³⁷⁾の作った『A Dictionary of the Chinese Language』(華英字典、一八二五³⁸⁾)を見てもよい。大きく分けて、部首別配列の巻と、発音別(アルファベット配列)の巻とで構成されている。図6は発音別字典(『五車韵府』)のシラブル293番「shen」の場所だ。「陝」の字はやはりこの「shen」に配置されている。そしてこの字の解説のところでは、

陝西 Shen-se

shen 自 | self assumption; to assume.

9222. [/] To sacrifice to heaven; to resign to, as the ancient king 舜 Shun, did to 禹 Yu. In the books of the Han dynasty, this word was often written 禪 Shen, and succeeding ages used them for each other.

9223. [-] Smell of sheep; rank; frouzy; fetid; the fat of sheep. The smell of all animals that feed on grass or herbs. Chow shen 臭 | rank; frouzy; fetid.

9224. Used in the sense of the preceding. Read Tan, To expose a part of the arm or breast. A man's name.

9225. Shen or Shan. From door and a cross line. A cross bar with which to fasten a door. Shen mun | 門 to shut or bolt a door way.

move hither and thither.

Shen t'een | 電 a flash, or the flashing or darting of lightning.

Shen yu | 楡 specious; artful; adulatory.

9227. [/] From a flash and fire. The motion of fire; the darting motion of lightning. The second and third forms are also read T'een.

9228. [/] A species of fever and ague, in which there is an interval of several days.

9229. (\) Shen-se | 陝 a province adjoining Honan, on the west; the region in which, on the page of history, the Chinese first appear; it was anciently called 虢國 Kō-kwō. Tsin 秦 the first universal monarch (who sub-

図 6

という綴りになっていることがお分かりだろう。さて、こういう古い辞書を見る時は、その字だけを見てはならない。同じ音節に属する他の字にも注目しなければならない。この「shen」の音節に並んでいる字はついでに

SHAN.—CCLXXXVII TH SYLLABLE.

Manuscript Dictionary, Xan. Canton Dialect, Shan, or San.

山 9087. (-) A hill; a mountain; hills in general. Wild, applied to birds. Shan chuen | 川 hills and rivers, an account of them. Shan chay | 車 a wheel for raising water turned by the current of a stream. Shan fung | 峯 the peak of a mountain. Shan go | 鵝 a wild goose.

山 海關 a pass at the eastern end of the great wall, on the sea coast between the province of Chih-le and Man-chow Tartary. Shan-se | 西 a province on the west of Shan-tung. Shan tung | 東 a province of China. Shan chuen kwei shin wang yen | 鬼神妄言 unfounded tales about the spirits of hills and rivers. Shan yow kan | 由柑 species of Evonymus. Shan soo hing | 素馨 species of Jasmine. Shan kia keih | 金橘 Daphne Indica. Shan keung | 羌 species of Alpina. Shan pin lang | 檳榔 Callicarpa. Shan shih lew | 石榴 species of Gardenia. Shan hwang pe | 黃皮 species of Hypericum. Shan keze shoo | 介樹 species of Fagara.

PART II. X 8

図 7

善繕膳鄯單鯨蟬扇扇煽煽扇
 詹詹贍贍贍贍贍贍贍贍贍贍
 贍贍贍贍贍贍贍贍贍贍贍贍贍

である。さて、これらの字には、大雑把にだがある共通点があることにお気づきだろうか。試しに日本語の音読みで読んでみていただきたい。

扇煽閃陝… せん

善繕膳禪… ぜん

音読みが「せん」か「ぜん」。いずれも「えん」に子音のついた音になっているのである。「単」は「たん」だが、この字には「せん」の読みもあり、そのことはこの辞書にも明記してある。また「閃」にも「shen」と「shan」の二種類の読み方があるところの辞書は書いている。つまりこれは、これらの字が当時は「せん・ぜん」系統の発音であったこと、少なくともこの辞書を作った西洋人にはそう認識されていたことを意味する。しかも大切なことは、これらの字はみんな、現代中国語では「an」の発音だ、ということなのである。

一方この字典にはシラブル287番にちゃんと「shan」の項目があつて(図7)、そこに属する漢字は、

山汕汕汕杉衫刪珊姦潛嗲

である。そして、これらの字の日本語音読みはみんな「さん」、つまり「あん」に子音がついた音になっているのである。いずれも現代中国語では「shan」である。「じ」から、日本語の音読みが「えん」の字と「あん」の字が、古い華英字典の「en」と「an」とにきちんと対応しているということが分かるのである。このことを簡単に整理す

るならば、

現代中国語で「an」と読む字には

昔「en」系の発音だった字

善、扇、閃、陝、等々

昔「an」系の発音だった字

山、杉、衫、珊、等々

がある。そしてそれは、日本語の音読みとほぼ対応している。

ということになる。⁽³⁸⁾

つまり西洋語の中で「陝」が昔から「shen」と表記されていたのは、決して理由がないのではなく、古い時代に「えん」系統の発音であったことと関係があるのだ。だから当時中国に渡った西洋人は、当時の発音に合わせて、ローマ字を「shen」と書いた。その綴りが後々まで、中国語の発音が「an」になってしまったにもかかわらず、引き継がれた、というわけなのである。一方「山西」の「山」は昔から「shan」だったのである。

ク、「郵政式拼音」について

これで、現代中国語の発音とは関係なく、西洋言語の中で「陝西」省を示す表記が「Shensi」であった事情が分かった。昔の発音にちなんだ綴り方が定着して後々まで伝わったものであり、そこにはそれなりの理由があったと言える。しかし厳密に言つくと、地図上の「Shen si」系の綴り方は、清末の「郵政式拼音」に従ったものと考えた方がよいかもしれない。

歴代中国に渡った西洋人宣教師・外交官・商人たちは、中国の地名を表すのにそれぞれ異なる綴りを使っていた。問題になるのは、たとえウェード式のローマ字を使用していたとしても、昔から使われて定着していた綴りと、リアルタイムの中国語の発音に準じて表記した綴りとが、かなり異なるという不便が生じていたことだった。例えばこの「陝西省」にしても、昔から、

Shensi

と綴られていたのに、リアルタイムの中国語を表記するローマ字では、

Shanhsi

となってしまうわけである。これは特に国際郵便業務には不便である。

そこで、国際郵便では中国地名にこの綴りを使おう、という取り決めがなされた。これが「郵政式拼音」である。ウェード式を基準としつつ、古い発音に由来する従来の慣用的な呼び方、西洋人の使い慣れた綴りを取り入れたものとなっている。例えば「北京」を「Peking」とすることにも同じに明記されている。当時の「北京」は既に「Peking」だったのだからである。そして「陝西=Shanhsi」を「Shensi」と書くことも同じに盛り込まれているのである。つまり、西洋言語では「Peking」「Shensi」と表記することを中国人自身が認めていた、ということになるわけだ。図2の*印の注記にあった「慣用の英文」というのは、厳密にはこの「郵政式拼音」に従って西洋言語の中で用いられていた綴りのことだ、と一応理解しておいてよさそうだ。その意味では、資料c-1の「慣用の英文による」という注記は正しかったのである。

やや長くなってしまった。右で調べたことを一度まとめてみよう。

「陝西」の発音は現代中国語では「Shanxi」であるにも関わらず、西洋言語では「Shensi」と綴ることには理由がある。「陝」の字は昔は「shen」系の発音であって、西洋人はそれに準じてローマ字を表記した。後に中国語の標準語の発音が「shan」系統になった後も、「shen」の綴りは既に定着していた。清末になって「郵政式拼音」が定められた際にも、「陝西」は「Shensi」と綴ることが国際的に認められた。ゆえに現在も西洋言語では「Shensi」系統の綴りが使われることが多い。

では日本の学校地図帳のカタカナ現地音表記において、こうした「慣用」に従って「陝西」を「シェンシー」と書くことを認めるべきなのだろうか？ いや、私はおかしいと思う。「注意願いたい」「陝西」を「Shensi」と書くのは、西洋言語での話なのである。つまりこれは、西洋言語と中国語との間での慣用なのであって、日本語は全く関係ないのである。「北京」は中国語では「Beijing」だが、従来の呼び方に従って「ペキン」と呼ぶ。これこそ「慣用」である。しかし、「シェンシー」という呼び方は日本語の中では一切使われてこなかった。それを、西洋の地図から見つけて来た人が、地図帳のカタカナ表記に持ち込んだ。これは「慣用」とは決して言えない。恐らく「Shensi」という綴りが英語のものなのか中国語のものなのか理解していない人が、この綴りを見ただけで、現地の読みとして地図帳に取り込んだものだと考えられる。

さて、考えるに、英文の中に中国の固有名詞が綴り字で出てきた時、「陝西」は英文では「Shensi」と表記されるんだということを知っていれば助かることだろう。では、西洋語では「シェンシー」と言うんだということの中高生にまで知らしめる必要があるのだろうか。いや、私はそこまで教える必要はないと思う。そもそも地図にはただ「シェンシー」と書いてあるだけなのだ。この表記が英文独特のものなんだとどこかで説明しておかないと、結局英文を読む際にも立たない。それに、これはあくまで中国語と英語との間の約束事なのである。中高生に教えておくべきことではあるまい。そんなことは将来必要になった時に調べれば分かることだ。むしろ、漢字は同じでも、言語によって地域によって時代によって読み方が違う、という理屈を十分理解させておくことが大切なのである。また英語など西洋語の中では様々な要因で形が変わるということも、知っておいて損はない。そうしてこそ、こうしたことに出会った時必要な情報を自分で調べる態度に結びつくのだと思う。時事英語を読むにも大切なことだ。

五、まとめ

地図帳の中国のページがカタカナだらけになっていることに驚いて調べ始めたカタカナ現地音表記だが、実際の地図の表記、その指針となった文献、そして実際の学校での教え方など、様々な方面まで話が広がってしまい、我ながらどのようにつまとめてよいか分からなくなりました。それに現時点で未調査の資料も山のように残っています。

しかしここで、本稿(1)～(4)において調べてきたことをとりあえず整理して、若干の考察を添えることを以て、一応のまとめとしておきたい。

ア、カタカナ表記の基本方針に関する問題

まず、中国地名の表記におけるカタカナ現地音主義の採用は、漢字廃止・漢字制限の流れに沿って作られたこと。右で見た如く、昨今言われるような、現地の人々への配慮ということは、後に言われるようになったことであって、当初は全く考慮されていなかったと考えても間違いないだろう。また、教科書や地図帳のための「手引き書」類では当初、カタカナ現地音表記を地名のみに適用し人名には用いない、とされていたことも忘れてはならない。

そうしてその裏には、「地名は発音を本体とする、ゆえにカタカナで書く」などの、文字や言語に関する根本的な誤解がある点、綴り(表記)と発音(音声)とを素朴に混同するなどの初歩的な錯誤が数多く見られる点なども看過できない。

また当初の規定によれば、「中国の地名はカタカナで書く、当分の間漢字を添えてもさしつかえない」となっていた。つまり漢字の読み方ではなく、漢字を廃した上での地名の正書法がカタカナ書きだとされていたのである。ゆえに現在(カッコ入りや小さな文字ではあるものの)とりあえず漢字が添えてあっても、それは単に「当分の間」のお目こぼしに過ぎないということなのである(この規定が改廃されていない限り)。

さらに、漢字とカタカナ現地音表記を、西洋語の原語と日本語の外来語表記と同じ関係だと見なす、即ち漢字を西洋語の綴りと同じに扱う、という考え方も見られた。これは「ワンリー長城」「ター運河」「チュー川」「オーメイ山」などという特徴的な書き方と密接な関係があるとされる。つまり「テムズ川」「セーヌ川」などの西洋河川名に準じた扱いにする、というわけだから。これは漢字名の河川にはそもそもなじまない面があるのだが、カタカナ表記ではぼつさり切り捨てられている。一方「黄河」と「長江」に関する歴代の表記のブレは、その切り捨てたはずのものに対する妙なこだわりが生んだもののようにも見える。

イ、実際の地図上の表記に関する問題

右で見た基本方針の上に作られた地図帳であるが、これまでいろいろ調べてきたことを踏まえて申し上げるならば、残念ながらそのカタカナ現地音式の中国地名は、やはりこれで表記を統一できるほどのものではなさそうだ。細かな間違いもある。また間違いとまで言えなくとも、いろいろな要素が入り交じっていて、不統一に拍車をかけている。ただでさえ語学上の解釈の違いにより、カタカナ表記は統一が難しいところに加えて、現代仮名遣いや外来語の表記など、国語政策の影響も色濃く受けている。

また地図帳の表記が、地名表記の「手引き書」類の通りになっていないことも多かった。「手引き書」に掲載されているのはあくまで「地名表記の例」だけなので、その例に入っていない地名については

各出版社の裁量で処理されることもあったようだ。「ワンリーの長城」や「ター運河」はその例だと考えられる。一方、昭和五十年の地図帳で、「黄河」と「揚子江」の読みは「こうが」「ようすこう」なのに、「長江」だけが「チャンチャン」と不統一になっていたことは、その時点の「手引き書」に「黄河」と「揚子江」しか掲載がなく、「長江」が載っていないかったことに原因があるのかもしれない。つまり、「手引き書」の例外規定に「長江」がなかったため、他の地名に機械的に合わせて「チャンチャン」とカタカナにした、という事情が考えられるのである（こつこつのお役所仕事と言つのだらう）。

いずれにせよ、歴代各社の地図帳の中国地名表記は、あまりにころころ変更されすぎたように思える。それぞれの変更には、その都度それなりの理由や根拠があったことは、詳細に見れば分かってくる。しかし事実上、地図の地名は「チャ」「チヤ」「チア」などの、よほど注意しなければ見逃しそうな細かいところまで、突然変更される。しかもそれは、地図帳のどの地点に発生するかわかったものではない。特に「黄河」「長江」などの地理的にも歴史的にも重要な名称が従来二転三転していることは、決して小さな問題ではないと思われる。現行の地図帳が決定版になるとも思えない。今後も細かな変更は続くことだろう。そしてそれは、世代によって習った言い方が異なるという状況を生み出しかねないのである。

ウ、運用上の問題

文部省から出された手引き書にせよ、後に教科書研究センターから

出された手引き書にせよ、実際にそれが教科書や地図帳の編集にどれほどの拘束力があつたのか分らない。カタカナ現地音表記自体を放棄した本は存在しないので、大筋ではしつかり拘束されているわけだ。しかし個々の細かい表記については、地図帳の上の表記は必ずしも手引き書と同じではない。そうしたことが、地図帳間の表記の不統一の原因となつていると考えられよう。

また実際に教壇に立つておられる先生方の考え方もまちまちで、地理はカタカナ現地音・歴史は従来読み方、という方もあれば、地理歴史に関係なく民国以降はカタカナ現地音・それより前は従来読み方、という方もあつた。一方で、地理でも歴史でもカタカナ現地音は考慮してないとおっしゃる方もある。また、先生方の教え方以外にもっと重要なことは、教科書・地図帳の表記と、世間での常識的な表記や読みとが乖離かいりしているということである。「ワンリー長城」なんて言い方、学校以外で誰が使っているというのか。いやその内、「ワンリー長城」しか知らない、「万里の長城」を知らないという子が現れるかと思つと、空恐ろしい。実際、「チャンチャン」しか知らない中学生は既に現れているそうだから。

そして非常に大きな問題、入学試験や採用試験などでは今後どのような形で出題されるのか、ということも非常に気になる。現在でも「つかり」「リヤオ」と書くのと「リヤオ」と書かねばをもらえないというところが実際に起きている。今後は「リアオ」と書かねば×ということも起こり得る。しつこいようだが、漢字なしで「ジョンチン、チンチョウ、ランチョウ、ジョンチョウ、チョンツ」から正解を選ぶ

よつな問題は御免こうむりたい。我々中国語の教員でも正解に行き着くのが難しい。それに生徒たちにとつても、これを丸暗記するくらいなら漢字で覚える方がよほどマシなのではないか。

さらに大きな問題に、試験の採点の公平性を保つのが難しいということがある。実際、教科書や地図帳に漢字とカタカナとが両方書いてある以上、受験指導に際しては、どちらで解答してもよいという指導にならざるを得ない。しかし、その場合に困つたことが生じる。漢字で解答した場合、明らかな誤字があれば×になる。一方カタカナ現地音表記で解答した場合、少々書き方が違っていてもだいたい合つていれば、ということになりかねないのである。そもそもカタカナ現地音表記は、一つの書き方に統一できるような代物ではない。おまけに、採点する先生方がみんな中国語ができるとは限らない。どこまでが許容範囲か、などということは中国語の専門家でなければ判断できない。すると、カタカナなら適当に書けばとにかく、「タン」でも「チン」でも「ティン」でも「ツン」でも「テン」でも「トン」でも「トゥン」でも、いや、もっともつと違っていても、みんなでお手々つないで一等賞、ということにならない保証はないのである。

ならば、受験において正解とする表記をあらかじめ一つだけ決めておけばよからう、などとおっしゃらないように。外来語のカタカナ表記なんてものは、一つの書き方に統一するのが本質的に難しいものである。それを強引に地図帳の書き方のみが正しいと決めてしまつたらば、地図帳はもう表記の基準などではなく、統制のよりどころという機能を持つことになる。それに、正解を一つに決めたとしても、語学

的には決して間違いとは言えない書き方で解答した受験生があった場合、彼だけを×にする根拠がなくなってしまうのである。

いや、これは結構面倒な問題で、例えば「チン」という正解に対して「ティン」と書いた答案があった場合どうすべきか。もしも元の中国語が「ting」や「ding」ならば「ティン」でもである。しかしもしも「in」や「bin」だったら「ティン」では×になる。そうした判断が採点現場できちんとできるものだろうか。中国語のテストでもあるまいに、「ティン」と書いてよいかどうかを受験生に問えるはずもない。しかし「in」が「ティン」と書いてあれば、語学的にはこれを上げるわけには絶対にかかない。どちらでもよいというわけにはいかないのである。既に述べたように、地図に「チン」と「ティン」の使い分けが導入された以上⁽¹⁾、こうした問題が起こるのは目に見えている。

ならばマークシート問題ならよからうとおっしゃるか。いや、「リヤオトン」と「リヤオトン」と「リアオトン」と「リヤオトウ」の区別を問うような問題に一体何の意味があると言うのか。目で見て正解を選ぶマークシート問題ならば、そもそも漢字で出題する方がよほどよいのではないか。実際、マークシートという出題形式は、うまく使えば漢字教育にも有利な点はあるのだ。

またこれは歴史の例だが、蒋介石を「チ、エン、チエシー」、毛沢東を「マオツエートン」と誤って書いている歴史教科書も存在する。⁽²⁾「蔣= jiang」を「チエン」と書くのは単なる誤りである。「チャンノチアン」が正しい。また中国語の「e」は「エ」と読んでほならない、とは我々

中国語教員が日々学生にうるさく言っていることである。もしこの教科書でカタカナを覚えた受験生が「チ、エン、チエシー」「マオツエートン」と解答した場合、中国語を知っている採点者は×にする可能性が高い。受験生諸君、ゆめゆめこういうカタカナを暗記しないが吉ですぞ。

地名の手引き書が、カタカナ現地音表記を人名には適用せず地名のみに用いる、と述べていたことを思い出していただきたい。しかし事実上、歴史教科書も中国人名にカタカナ表記を添えている。しかも地理関係とは異なり、多くの歴史教科書が「もつたくとつ」「マオツォートン」のように二重にルビを振っているのである。人名についても地名同様の書き方の基準があるのか、実際の表記はどのように規定されているのか、これはさらに別途調査してみたい。

六、おわりに

国語審議会「中国地名・人名の書き方の表」（昭和二十四年七月三十日建議）については本稿で何度も触れた。これに先立ち、昭和二十四年三月から四月にかけて、国語審議会は六回にわたって「外国（中国）の地名・人名の書き方に関する主査委員会」を開催している。その資料は文化庁の「国語施策情報システム」⁽³⁾で読むことができる。その中には「懇談会における意見等要領」という記録もあって、出席した各方面の専門家の発言が記録されているのだが、以下いくつか注目すべき発言を抜粋してみたい。

(安藤会長)⁽⁴⁴⁾

むずかしい漢字をへらすのが、漢字制限である。

(原主査委員長)⁽⁴⁵⁾

これからは、漢字を考えないで、カントンならカントンでおぼえてしまおうというのが、この案の趣旨である。これはシナ語を学ぶ便利のために用いるのではない。

もちろんこれは正式な議事録ではなくメモ的な記録なのではあるが、それを差し引いても、いやはや、四の五の言つなと言わんばかりの高压的な発言に見える。ただ、中国地名のカタカナ現地音化は現地の人たちの読み方への配慮から始まったものではなく、漢字廃止・漢字制限の流れから作られたものだったという私の推測も、あながち間違っていないことがこれで明らかとなった。「カントン」と丸覚えすればよい、それが元々漢字で書かれていることなど一切忘れてしまえ、というわけだから。

(松坂委員)⁽⁴⁶⁾

これまでのように、知識階級にさえ便利ならば、国民大衆はどうでもよいというのではない。中国の地名人名でも、少数学者にしかよめない漢字よりも、だれでもわかるかな書きの方が国民大衆にとってよいのである。

やはり「階級」といった話が持ち込まれている、ということ以外に、「かな書き」即「だれでもわかる」という素朴な前提があることにも注意すべきであろう。しかしその「だれでもわかる」はずのカタカナ地名が混乱の原因になる場合もあることは、拙稿でも指摘した通りで

ある。それにこうした発言というのは、表向きは「国民大衆」を擁護してやっているんだという態度をとりつつ、その実「国民大衆」というのは本来無学でバカなんだということを前提にしているとも言えるわけで、どうもいい気持ちはしない。

(倉石委員)

中国の地名・人名を漢字の日本音でよむのは、中日の連絡をはばむものである。少しでもむこうの音に近いものを知れば外交上にもよい。

日本漢字音で読むことが日中の連絡を阻むとは具体的にどのようなことか、このカタカナを読めば連絡がスムーズにいくものなのか、さらに、いきなり「外交上」とはいかがなものか。尊敬する倉石武四郎先生のご発言ではあるが、浅学の身の悲しさゆえ理解しかねる。

一方、このカタカナ現地音に反対する委員の発言も記録されている。

(和田氏)⁽⁴⁷⁾

同文のシナ文字をかなにする必要はない。かなで書くとしても日本音で書くのがよい。シナ音は多数の日本人にとっては無用であり、国際的にもかなで書いたのでは通用しない。

(石田氏)⁽⁴⁸⁾

日本人の大多数は中国語を日常生活に必要としない。シナの名でも、たいていは当用漢字の組合せでできているのだから、制限外の漢字についてだけ考えればよいのだ。

(菊地氏)⁽⁴⁹⁾

シナの現代音を日本のかなでは正確に書きあらわせないとなれば、

これを採用するのはどんなものだろうか。

また、委員会に参加した各方面の関係者の発言も掲載されている。例えば、

(通信省)

中国向け郵便物をあつかう職場にシナ文字の素養のある職員を配置しなければならなくなる点で問題になる。

とある。これは、

漢字表記だとそのシナ文字の分かる(つまり支那語の読める)職員を配置せねばならなくなるのでかな書きに賛成だ。

という意見だと考えられる(シナ文字とは漢字のことだろうから)。

ただ、素朴に考えるに、中国向け郵便物を日本で取り扱う場合、それが中国に向けたものだと分りさえすれば、そこから先は何省のどの町の誰死であるかまで読み取れなくともすむはずなのだが、いかがだろう。それが仮名書きになっていたところで、日本の通信省職員にはあまり関係ないように思うのだが、もしも全部仮名で書いてあったら、今度は中国の郵便屋さんが困ることになるはずだし。いや、待てよ、これは逆で、

かな書きにすると、それを見てシナのどの地名のことか、どの漢字に当たるのかが分かる職員を配置せねばならなくなるので、かな書きに反対だ。

という意見なのか? それならまことにもつともだ。カタカナのまま中国に送ってしまうわけにはいかないのだから。ただ、文部省や国語審議会がいかにしゃちほこ立ちして中国地名をカタカナ書きにしたと

ころで、中国向けの国際郵便の表書きまでカタカナで書く人間などいはずはないのだが……。そもそも、日本、中国、中国、日本、いずれにせよ相手の国宛ての表書きくらいは書ける人でないと、国際郵便を発送することはなさそうなものだ。

まあ、会議で出たざつくばらん発言をそのまま書き留めたものだから読みにくいところがあるのは仕方がない。あまりとやかく言うべきではないのかもしれない。

以上長々と述べてきて思うことは、やはり地図帳の中国地名表記はこのままでよろしくない、ということである。地図帳は地図帳、世間は世間、ということではすんでいたからよかった。しかし今それが様々な形でほころび始めているように思う。実際、カタカナ表記が作られた当初と現在ではかなり状況が違ってきている。

これを最初に作った人々の根底に漢字廃止論があったことは、まあ間違いないことである。すると、百歩譲って彼らの立場に立つならば、中国地名をカタカナにしたい気持ちには分らないでもないのである。もしも漢字廃止が実現して、日本語がみんな仮名文字で書かれるようになったと仮定しよう。その場合、中国地名をどうするかということがたちまち問題となる。例えば、漢字を廃止すれば、

重慶

という漢字が使えなくなる。だからその代わりに、

じゅうけい

と書くとしたならば、「重慶」という中国語との文字上のつながりが

消え去ってしまい、後に残るのは「じゅうけい」という単に日本語の読み方を仮名で表記しただけのものになってしまう。文字面でも読みの方でも、原語とのつながりがなくなってしまうのである。言い換えれば、中国語では「Chongqing」^{チヨンチン}なのにとついで「じゅうけい」と読むのですかと尋ねられたとき、漢字を介在させずに説明することは不可能だということだ。だから漢字廃止に先立ってあらかじめ、

チヨンチン

という現地音表記を定めておく。そうすれば漢字がなくなっても、音声面で原語とのつながりを保つことができる、とまあこつこついう意図があったのかもしれないのである。しかし漢字廃止論は既に過去のものである。我々は今きちんと、漢字と音読みと現地音読みとの関係を考え直しておく必要があると思う。

さてそれを考える上でなおも残る問題の一つは、「現地の人たちの呼ぶ通りに呼ばないと失礼だ」という言い方に我々がどう答えるか、ということである。では「現地の人たちの書く通りに書かないと失礼だ」ということにはならないのですか、なぜ音声だけにこだわらなければならぬのですか。そう問い返すことには大きな意味があると感じている。もちろん、タイの地名はタイ文字で書く、ロシアの地名はロシア文字で書く、などということは非現実的である。日本の地図が基本的に日本語で書かれるのは当たり前のことだからだ。しかし、中国の地名はタイやロシアとは事情が異なる。日本と中国は同じく漢字を使っているのである。ならば使える漢字は使っておけばよい。そういう面もあるわけだ。

考えるに、中国地名をカタカナだけにすればよいと考えた人々に一番欠けていた知識は、漢字という文字の持つ性質だったのではなからうか。本文中でも既に触れたが、漢字はアジアの絆なのである。国により地域により発音は違う、しかし字を見れば分かる、それが漢字という文字の持つメリットであり、そのことが歴史的にアジアを結びつけてきたと言える。戦前は各国が正字体を使っていたのでそれをもっと徹底していた。中国語ができなくとも漢文で書かれた文書を持っていればそれを読んでもらえた、そのことは非常に大切なことである。また現在でも、地図や看板を頼りに中国で日本人が何とか目的地にたどり着ける、ということもあるはずだ。それを、好き好んでわざわざ漢字を排除してカタカナにしてしまっただけ、どうしようというのか。アジアとの絆を断ち切りたい、アジアの中で孤立したい、と言つのならそれも自由だが、アジアとの絆を考えれば、漢字というものの大切さを無視することはできないと思う。

その意味では、日本の地図帳の中国のページにおいて地名を基本的に漢字で表記することは、日本のローカルルールであり、なおかつ国際ルールでもある、と言える。日本の地図が日本語で書かれるのは当然のこと、その意味でこれは日本のローカルルールである。しかし、発音は違っても字を見れば分かる、という面からすればこれは立派な国際ルールだとも言える。中国地名をカタカナ現地音で書くことに、それに代わるだけのメリットがあるのかどうか、真剣に考えてみる必要がある。そもそも世間の常識を教えるのが教育である。奇をてらったことをわざわざ教えるのは教育が本来担うべきことではない。

歴史的には、現地の人への配慮から始まったことでは決してなく、漢字廃止・漢字制限から来たものだとするれば、それを現在後生大事にする必要もなさそうだ。いや、カタカナ現地音にも利用価値はある。それは世間のあちこちで既に利用されていることではないか。教科書や地図帳が提供すべきは、そのカタカナ表記の活用を助ける基礎になる知識なのである。

つまりそれはどういふことかと言つと、現地音方式のカタカナを利用するには、その基礎としてどうしても漢字が必要となる、ということなのである。カタカナ現地音を自然に読めるには、つまりどこで切れてどういふニュアンスなのか自然に分かるには、漢字を読めることが必要条件なのである。中国語の知識ではない、漢字とその音読みである。漢字の存在を消し去り、これからはカタカナで書くんだと決めればそれで丸く収まる、というほど単純な話ではないのだ。まず日本語の中で漢字に慣れているからこそ、その字が外国語では、同じような字ではあるけれども別の音で読まれることが理解できるのである。カタカナ表記でうまくいくように見えたのは、単にまだみんなが漢字を見知っていたからなのだ（だから、ああこの漢字は中国語ではこう読んだなと連想できる）。その意味で、皮肉なことに、カタカナ現地音を普及させ利用するためにはその前提として漢字教育が必要だ、ということになるのである。全く漢字を知らずにカタカナだけだと、状況は全く違ってくる（まあカタカナ主義者はそれを狙ったのかもしれないが）。

例えば、

サンシヤダム
サンメンシヤダム
チントンシヤダム
リウチヤシヤダム

これを音節ごとに正しく切つてすんなり読むためには、

三峽ダム

三門峽ダム

青銅峽ダム

劉家峽ダム

という漢字を見たことがある、ということが必要なのである。さもなければ、ここまで長いカタカナの羅列になると、

リウ・チヤ・シヤ・ダムなのか

リウチ・ヤシヤ・ダムなのか

リ・ウチヤ・シヤ・ダムなのか

把握できないのである。ちよつと「アバオアクー」というカタカナを初めて見てどこで切れるのか分からないのと似ている。「劉家峽」という漢字がメインであればこそ、またその字を見て「りゅつ・か・きょう」ダムなんだなと意識できるからこそ、ああ、中国語では「リユー・チャー・シヤ」ダムと読むんだなとイメージできるのである。この点は、発音が違っていても漢字を見れば何となく分かる、というアジアの絆としての漢字の機能を生徒たちに理解させるのにも役に立つことだ。そんな珍しいダムの名前は子供に教える必要がないから、うるさいことを言うな、とおっしゃらないように。これらのダムの名前は、

中国の治水事業に関する話ではわりとよく触れられるダムなのである(試験にも出題されている)。それに、どうせ子供に関係ないなら、カタカナにせずに漢字のままにしておいても構わないのではないか。テストに出る出ないは関係なく、地図には書いておかなばならないわけだし。もちろん、テストに出ることだけ、暗記すべきことだけを書いておくのが地図帳だ、という考え方もあろう。しかし学校を離れてもそのまま使える地図帳、いろんな知識が詰まった地図帳、というのも大切なことではないのか。⁵⁰⁾

地図帳が中国語学習のためにあるのではないことは言つまでもない。しかし生徒諸君が将来もしも中国語を勉強することになったとしても、このカタカナは大して役に立たない。むしろ役に立つのは、しっかりと漢字を理解していることの方なのである。中国語の発音を学ぶ上で、もちろんメリットがある。日本語の音読みと中国語音には密接な関係がある。だから中国語の発音の規則を身につけるにも、日本語の音読みは非常に役に立つのである。

但しなおも、漢字は難しい、日本人にとって漢字を習得するための労力は無駄だ、とお考えの向きもある。しかしそれは、

書け、かつ読める漢字

書けもしないし読めもしない漢字

という二分法的感覚から来るのではないかと思う。書け、なおかつ読めねばならないと考えれば、漢字というのは無限にあるように感じられよう。いや実は、世の中には「書けて読める漢字」と「書けも読めもしない漢字」との間に、

書けと言われても書けないが、見たら何となく分かる漢字

というものがあるのだ。そしてその中間層の文字というのが非常に大切なのである。常日頃から漢字に親しんでいれば、その中間層の文字を増やすことはそんなに大変なことではない。常用漢字以外の漢字が地図の中国のページにあっても、それほど気にすることではないと思う。おまけに昨今のコンピュータなど情報通信機器の発達に伴い、書けなくとも「変換」できればよい、という場合も多いわけなのである。その意味では、そうした機器の進歩は、漢字を巡る環境にとってプラスでこそあれ、マイナスではない。

いやそれでも、地名はともかく、人の名前というのはその本人の読む通りに読んで上げないと失礼だ、とおっしゃる方がきつとおられることだろう。繰り返すが、私はカタカナで現地音を表記することを全否定はしていない。必要に応じて使い分ければ十分に役に立つ。特に人名は、日本に来てから成り行きでそう呼ばれるようになった、という場合も多いことだろうし、個々のケースでそれを重んじればよいのである。喩えて言うならば、「リンミンメイ」は「リンミンメイ」でよい、「ヤンウェンリー」は「ヤンウェンリー」でよい、ということなのだ。書く時も、日頃カタカナで書いているならばそのまま「リンミンメイ」「ヤンウェンリー」と書けばよい。絶対に漢字書きの音読みしかダメだ、というのも逆に変な話だ。但し一方で、乗員名簿を作る際には、「林明美」や「楊文里」という漢字情報も掲載して、漢字や音読みでも検索できるようにしておくことは必要である。「林」という字は、音読みもカタカナ現地音も「りん」だからまだよいのだが、

「楊」さんが、「ヤン」さんと「よう」さんで別のところにあると検索ができないのだ。「ヤン」さんであるとして「よう」さんであるとして「楊」で検索できるようにしておかないと困る面があるのである。現在、多くの大学で中国人留学生の学籍情報がかなり混乱しているのは事実のようである。「王」さんが「おう」さんで登録されているか「ワン」さんで登録されているか分からない、漢字で検索もできない、という学校があると聞いたことがある。

先日アメリカのテレビドコマを見ていたら、「福建」=「Fujian」を「フージアン」のように発音していた。もちろん「フージェン」が原音に近い読みのだが、役者は中国語を知らないので無理はない。丁度女優の「章子怡」=「Zhang ziyi」を「チャンツイイー」と誤読し、それが定着してしまったのと同じ事情である。地図帳式カタカナなら章子怡は「チャンツイイー」となる。またピアノリストの「ユンティリー」のことを、FMラジオで「ディリーは、ディリーは……」と繰り返しているのには驚いた。彼の名(芸名)は、

李雲迪／Yundi Li

である。李が姓である。つまり、

李 = Li 雲迪 = Yundi

なのだ。西洋式に姓を後ろに置いて「Yundi Li」なのである。放送局が中国人の名前などどうでもよいとお考えなのならそれも仕方ないが、そうでなければ「ディリー」で切るなどそれこそ失礼というものだ。「ハナコ・ヤマダ」を「ハ・ナコヤマダ」と読むようなものではないか。

ついでに申し上げると、李雲迪のオフィシャルサイト(日本語)のプロフィールは、実にでたらめだらけだ。以下、小うるさいようだが一々指摘してみる。

四歳の時のアコーディオンの先生「タン・ゼンミン」

一見して、素人さんが適当に書いたと分かるカタカナだ。調べてみるとこの先生のお名前は、「譚建民」。拼音ローマ字は「Tan Jianmin」。カタカナの書き方は複数あり得るとしても、「Jan」が「ゼン」と読めるはずがない。地図帳式なら「タン・チエンミン」となる。

七歳の時のピアノの先生「ウ・ユー」

これも一見して変だ。この先生のお名前は「吳勇」。拼音ローマ字は「Wu Yong」。もちろん「Yong」を「ユー」と読めるはずがない。「ユー」って「勇」の日本語音読みじゃないか? ここだけ日中混合読みかよ? 地図帳式なら「ウー・ヨン」となる。

九歳から師事したピアノの先生「ダン・ツァオイ」

これも調べてみたら先生のお名前は「但昭義」。拼音ローマ字は「Dan Zhaoyi」。「zhao」が無気音も濁音で表記すべきである。それにこの書き方だと「ダン・ツァ+オイ」に見えてしまう。まあどつせ中国語のできない人が適当にローマ字を読んだのだろうが。地図帳式なら「タン・チャオイ」となる。

現在 SHENZHEN 芸術学校に在学中

これ、彼の経歴からして、「深圳芸術学院」のことじゃないのかな?

ならば拼音ローマ字は「Shenzhen」となるはずだ。地図帳式なら「シェンチェン」。あれえ？「SHENZHEN=しんせん」って、日本語の音読みじゃないの？おまけになぜわざわざ「SHINSEN」とローマ字で書くの？もうワケ分かんない……。彼のオフィシャルサイトがこのザマでいいのか？

こうした中国人に対する無礼というのも、みんなカタカナ現地音表記が災いしていることに注目いただきたい。さすがは外国人への配慮ではなく漢字制限のために生まれたカタカナだけのことはある。前稿(1)で触れた、作曲家の「馬思聰」を「マス・ツォン」と読んだ例でも同じことだが、もう少し配慮なさってはいかがが。テレビ・ラジオでは、中国のスポーツ選手は音読み、音楽家や映画監督・俳優などは現地音読み、ということに事実上なっているようだが、よほど慎重にしないとこのような過ちは起こりがちである。

一方、西洋語における外来語としての中国語が、西洋人の読み方でバーチャルに固定してしまうことは、ある程度仕方がない。これは、非漢字圏の西洋語と漢字圏の言語との間に起こる、非常に難しい問題の一つなのである。さらに日本においては、同じ単語を中国から直接移入させず、一旦西洋語を経由して移入させている例があるので、話をややこしくしている。要するに、日本では「福建」は「ふっけん」、「陝西」は「せんせい」、「章子怡」は「しょうしい」でよさそうなのを、「章子怡」は英語式で「チャンツイイー」と呼び、また「陝西」は「シェンシー」と「シャンシー」を混在させている、というのもそういう問題を通る一つの現象だと考えよう。「Zhang ziyi」は英語経

由なのではなく、日本人だつてこの綴りを見れば「チャンツイイー」と読んでしまう、とおっしゃる方がいることだろうが、確かにそうだろう。しかし普通に音読みで読んでいけばそもそもそういう問題は起こらなかったのである。彼女は中国人なのだから、わざわざ英語式の読み合わせることもなからうに。その一方、「ブルース・リー」や「ジャッキー・チェン」がそう呼ばれるのは、それが元々英語名だからである。彼らは別に「李小龍」「成龍」という漢字名を持っている。とまれ、やはり個々のケースで呼び方が違っていてもある程度仕方がないのである。だからと言ってでたために読んでもよいということにはならないが。

十数年前、私が地図帳のカタカナだらけの中国のページに気づいて直感的に感じた強烈な違和感の正体が、だんだん分かってきた。アジアの絆としての漢字の性質を無視したこと、漢字を嫌悪する漢字廃止論・漢字制限論がその根底にあったこと、そして実際にこれを運用するには様々な矛盾や困難があること、である。

例えば、手引き書の解説が、必要に応じて中国地名のカタカナに拼音ローマ字を添えて「原音」を示す、というアイデアを持っていたことを思い出していただきたい。中国語の教科書に拼音ローマ字が添えられていれば、もちろんそれは「原音」を示していると考えてよい。しかし地図帳のカタカナにローマ字を添えても、それは「原音」を示していることには必ずしもならない。そこで意識しなければならぬのが「約束事」ということだ。つまり、

綴り=音声

ではないのだ。

綴り 約束事 音声

なのである。どういう綴りをどう読むかという約束事があって初めて、綴りが音声を表記していることになる。綴りが音声を表す機能を担えるのは、その約束事があるからである。

中国語の教科書に拼音ローマ字が書いてあれば、それは原音を表しているとは見なしてよい。なぜなら、中国語を勉強する人は、最初にそのローマ字の約束事を習うからである。しかし地図帳は中国語の教科書ではない。地図帳の地名にローマ字が添えてあっても、地図帳を利用する人にはその読み方の約束事を知っていることは要求されない。

よって、そのローマ字はそのままでは発音を表記する機能を担えない。要するに、中国語を知らない「yan」が「イエン」という音を表しているとは分からない、ということなのである。英語の綴りにしても、「right」を正しく読めるのは、その英語の約束事を身につけているからなのである。

そして、カタカナ現地音表記は、前提として漢字を認識しているからこそ機能する、ということは先ほど述べた。それは右で言う「約束事」と同じことなのだ。中国地名を現地音式カタカナで書いても、それは直接発音を表示していることにはならない。なぜなら、地図帳の読者には中国語の知識は要求されないからだ。カタカナでこう書いてあれば元の音はこんな音だ、ということを理解するにはかなりの語学力を必要とするわけだし、カタカナの読み方を把握するにはあらかじ



図 8

め漢字を認識しておくことが前提となる。約束事を共有していないと音声には直接結びつかないという点では、ローマ字もカタカナも大差ないと言えるのである。特に、漢字を排除することを当初の目標としたカタカナは、殊更トウモロコシにその約束事に対する配慮を欠くことになるのは、既に見てきた通りである。先ほど触れた中国人名のでたらめさにして、少しでも漢字を参照する態度があれば避けられたことなのである。

自分たちはカタカナでは習わなかった、いつのまにかカタカナになっている、というのは、我々の世代だけではなく、多くの人々に共通する感想であるようだ。しかし、既に見たように、実際の地図帳はかなり古い時代からカタカナ地名表記になっている。それなのに我々が、近年になって始まったかのような認識を持っているのは、結局教科書や地図帳がカタカナ現地音主義を採用してからも、学校の先生を含む世間の人々はそれを無視して従来通りの読み方を続けてきたためだと考えられる。この教科書と世間との齟齬そごと乖離かいりの状態は、放置しておいてよいものだろうか。もちろん、世間の方を全て地図帳に合わせるのはリスクが大きい。むしろ世間で使えるものを教えるのが、ある意味教育なのではないか。微分積分など卒業後の生活では一切使わない、ゆえに勉強しても無駄だ、という言い方はよく耳にする。それが間違っていることは言うまでもない。しかし地図帳式カタカナ地名は、それこそ卒業したらまず使うことはない。微分積分とは話の次元が全く異なるのである。¹⁴⁾

では今後の地図帳はどうあるべきか。カタカナ現地音表記を教科書・地図帳から全面排除する、というのも一つの方法だ。心情的にはいっ

そそうしてしまいたいのはやまやまだ。先日、戦前の古い地図帳を何種類か古書店で見つけた。図8はその一つである。その支那のページは(当たり前だが)見事に漢字ばかりであった。このところずっと地図帳のカタカナ地名と格闘してきた私の目には、これが実に新鮮に見えた。いや、これが本来の日本語の地図のあり方なのだろうか。

一方、カタカナで現地の発音を表記することにもそれなりのメリットはある。むしろ、本来の表記や読みとは役割が違つと考えるべきだろう。それならば、そのメリットを活かして補助として利用しつつ、本来の表記・本来の読みと上手に棲み分けをすることはできないものだろうか。いや、私はできると思う。そのための試案(私案)も持っている。ただこれは、中国語や漢文の仲間だけではなく、国語学や教育学を始め様々な分野の方々のご指導を仰ぎつつ慎重に形にしなければならぬことであろう。これからしっかりと勉強して検討して行きたいと考えている。

注

(1) 『地図帳の怪』(3) 地名表記の手引き書をめぐって、『文化科学研究』21-1(中京大学文化科学研究所二〇〇九)所収

その他に、これに先立つ

『地図帳の怪』中国地名のカタカナ表記の功罪、『文化科学研究』

14-2(中京大学文化科学研究所、二〇〇三)所収

『地図帳の怪』(2) 『万里の長城』はなぜ『ワンリー長城』になっ

たのか、『国際教養学部論叢』第2巻第1号(中京大学国際教養学部、二〇〇九所収)

も合わせてご覧いただきたい。なお二〇〇三年のものには番号がないのだが、本稿では仮にこれを(1)としておく。またこれは論文ではなく評論・エッセイだが、

「社会(地理) 中国地名・カタカナ表記の怪」、『と学会レポート オタクの中国学入門』(楽工社、二〇〇七) 所収

「ター運河」とは、俺のことかと。大運河 言い…トンテモ化する 社会科教材のカタカナ現地音表記」、『と学会誌』17号、二〇〇六)

「陝西」省は『シャンシー』省か。シエンシー 省か 地図帳の地名表記に関する一考察」(開田無法地帯『ぶらりオタク旅』¹³、二〇〇九)

「黄河」と書いて何と読む? 地図帳の中国河川名表記に関する一考察」(開田無法地帯『ぶらりオタク旅』¹⁴、二〇〇九) も参照されたい。

(2) 資料番号については前稿(3)を参照。

(3) 改訂調査研究会代表朝倉隆太郎『地名表記の手引』改訂について」(iii頁)

(4) 国語審議会「中国地名・人名の書き方の表」昭和二十四年七月三十日建議。文化庁「国語施策情報システム」(<http://www.bunka.go.jp/kokugo/>)でその全文を閲覧可能である。

(5) この国語課で増補した表は「中国地名・人名の書き方の表(便覧)」であり、資料c 1(センター旧版)に「付録2」として全文が掲載されている。

(6) 国語審議会「外来語の表記」昭和29年3月報告。文化庁「国語施策情報システム」で閲覧可能である。

(7) 地名の表記はとりあえず社会科学のみ。しかし外来語の表記は全科目に關係する。よってこちらを優先したのか。

(8) 前稿(3)の第四章を参照。

(9) c 1「付表4」「中国語拼音(ピンイン)」と仮名書きの対照表」には、

(3) 印は「中国地名・人名の書き方の表」によれば「ティ」または「トゥ」となるが、それをそれぞれ「チ」「ツ」に書きかえ

た。

と言つ注記がある(110頁)。

本稿(1)において、「ti」「ti」のカタカナ表記が不統一になっている点を指摘した(59頁)。そして「tian」を「テン」と書き、「ting」を「チン」と書くならば、「tiao」は「ちやう書くこと」になるのか、という疑問も呈しておいた。

「tian」を「テン」と書く理由が「i介音を無視する」ことにあるならば「tiao」は「タオ」となる。

「ting」を「チン」と書く理由が「ティ」を一律「チ」と書くことにあるならば、「tiao」は「チヤオ」(もしくはチアオ)となる。

もしも「tiao」の「ia」の部分を「エア」とするならば、もしくは「ティ」を「チ」ではなく「テ」と書くならば、「チアオ」となる。

という予想を立てていたのである。今、資料c 1を見ると、正解は「tiao=チアオ」だったようだ。但し本稿(1)では考慮していなかった「外来語の表記」を考えるに、「ティ」を「チ」ではなく「テ」と書くのは一種の例外措置らしい(「トゥ」を「ト」ではなく「ツ」と書くのと同様に)。その後資料c 2では「tiao」は「ティアオ」となっていて、「ティ」の表記が導入されることになる。

(10) それぞれウェード式と漢語拼音方案式の綴り。

(11) 「ア」「ヤ」「トン」の表記は、地名の手引き書よりむしろ、国語審議会の「外来語の表記」に従っているように見える。

(12) その他に、c 1の表で用いられた「ウェード式」ローマ字と「国音式」ローマ字を、現代に通用する「ピンイン式」ローマ字と「ウェード式」ローマ字に改めている。

(13) c 1「付録2」(4)「外来語の表記」について(266頁)

(14) c 1「付録2」及び文化庁「国語施策情報システム」。

(15) やはり表記と音声の区別がなされていない。「仮名」で「つづり」を書き表すとは、一体何をどうすることなのか。「to」という綴りなら「ト」、「tu」という綴りなら「トゥ」ということか。そういう「対応のルール」はあり得ることだが、それは決して原音や原綴りを「書き表

「ト」と書け」というようなものだから。

- (16) 余談だが、答申『外来語の表記』について、この『外来語の表記』は、外来語や外国の地名・人名を書き表す場合の仮名の使い方を示したものである。

(注) 昭和29年の報告では、外国の地名・人名の書き方については、別に考慮するとして、対象に含めなかった。

とある。(注)に注目いただきたい。昭和29年の時点では「外国の地名・人名」を「対象に含めない」とあるが、実際は我々が既に確認したように、「チ」「ツ」についてはむしろこの「外来語の表記」に従っていたと思えない。国語審議会は対象に含めなかったものの、地名表記の関係者の方は積極的にその方針に従った、ということなのか。この辺りの事情についてはさらに調査を要する。

- (17) 「付表1」7「中国」(80頁)
 (18) 「付表1」(3)「中国の地名」(149頁)
 (19) 「付表1」地名の書き方の例」の「中国」(77頁)
 (20) 「付表1」地名の書き方の例」「朝鮮」(84頁)
 (21) 「付表1」地名の書き方の例」8「朝鮮(Choson チョソン)」(87頁)
 (22) 「付表1」地名の書き方の例」(4)「韓国・北朝鮮の地名」(151頁)
 (23) 正仮名遣い(字音仮名遣い=歴史的仮名遣い)は決して書き方と読み方がずれる不合理な書き方ではない。これは昔の読み方を反映した仮名遣いなのである。ここは敢えて正仮名遣いを併記した。
 (24) なお「アムノックカン」の読みはフリー百科事典「ウィキペディア(Wikipedia)」の項目(最終アクセス2009/12/23)による。
<http://ja.wikipedia.org/wiki/鴨綠江>
 (25) 「鴨」という字は正仮名遣いが示す「トク」、昔は実際に「あひ=ap/af(元p韻尾)」のように読んでいた(入声音。蝶々が「てぶてぶ」であるのと同様)。そしてその「あひ」という発音は、朝鮮語における「aham」という読み方と符合する。中国語では後にこの子音が発音され

なくなっただけ「ya」なのである。

- (26) 『ウィキペディア(Wikipedia)』の項目(最終アクセス2009/12/23) <http://ja.wikipedia.org/wiki/陝西省>
 (27) 78頁。
 (28) 137頁。
 (29) 17頁。
 (30) 「カンシー」については、従来「広東」は「カントン」、「広西」は「グンせい」と呼んで来た。しかし「広東」が「カントン」である以上「広西」もそれに合わせて「カンシー」と呼ばねばならない、という地図帳独特のこだわりから採用されたのだと感している。また「呉淞(Wusong)」については、カタカナの原則からすると「ウーソン」となるのだが、昔はウェード式で「sung」と書いていたので、それに合わせてローマ字読みで「ウースン」と呼んでいた、ということではないかと思われる。これについてはさらに調査を要する。
 (31) 81頁。
 (32) 145頁。
 (33) 各表記法の綴り方を参照するには、中国語字研究会編著『中国語学事典』(江南書院、一九五八)所収「各種音標文字及び中国語音声転写法の対照表」が便利である。
 (34) Goode's school atlas : physical, political, and economic : for American schools and colleges, J. Paul Goode, 1925 ed, Chicago, Ill. : New York : Rand McNally, c1923
 (35) Keyzers Grosser Weltatlas, Heidelberg : Keyzersche Verlagsbuchhandlung, 1962.
 (36) , 1967
 (37) 英国人、一八〇七年来華。初めて聖書の漢訳を行った。
 (38) 『馬礼遜文集・華英字典』(大象出版社、二〇〇八)による。
 (39) ちなみに、これらの字の『中原音韻』復元音は、「せんぜん」系統

- leu 善扇煽繕膳
lem 閃陝
「さん」系統
san 山
sam 杉衫
san 珊
- であり、両系統の間では明らかに韻母が異なっていたことが分かる(藤堂明保編『字研漢和大典 学習研究社一九七八による』)。
- (40) 「手引き書」類にも誤りがあり、地図帳がそれに従った例もある。例えば a 2 (文部省)「地名の書き方の例」 「中国」には、「本溪」ペンチー(81頁)とあるが、本溪は「ben xi」だから「ベンシー」とすべきであり、「蚌埠」パンプー(80頁)とあるが、蚌埠は「Beng Bu」だから「ボンプー」とすべきである。実際の地図帳でも「パンプー(蚌埠)」と書いているものがあるのは(例えば帝國標準 H 6 / 7 など)、これに引きずられたのだろう。また余談だが音節一覧表に誤りがある場合もあって、例えば資料 c 1 の「付録 2」(4)「中国地名・人名の書き方の表(便覧)」162頁、「chiang」及び「chiang」の項目のカタカナが「チャオ」となっているがいずれも誤りで、それぞれ「チャン」が正しい。
- (41) 本稿第二章参照。
- (42) 清水書院『詳解 世界史 B』H 6 / 7、313頁。前稿(3)注(20)参照。
- (43) 文化庁「国語施策情報システム」(<http://www.bunka.go.jp/kokugo/>)
- (44) 国語審議会会長、東洋大学教授 安藤正次。
- (45) 中国の地名・人名の書き方に関する主査委員会委員長、専修大学教授 原富男。
- (46) 中国の地名・人名の書き方に関する主査委員、カナモシカイ理事長、松坂忠則。
- (47) 東京大学教授、和田清。
- (48) 国学院大学教授、石田幹之助。
- (49) 教育刷新委員会委員、菊地竜道。
- (50) 「アーラーシャントォチー」や「コールチンユイーチェンチー」などに至っては、「ツォチー」を「左旗」、「ユイーチエンチー」を「右翼前旗」と書いておかないと地図の価値が半減するとさえ思う。歴史の好きな生徒なら、これが「八旗制」と関係のある地名だと気づいてくれることだろうから。東京書籍の地図帳は「ホルチン右翼前旗」という表記を採用していて分かりやすい。やはり、後々何かを調べる時にもずっと役に立つ地図帳であって欲しいものだ。
- (51) 漢字名を「鈴美学」とする説もあるが、中国人に「鈴」という姓はないので、ここでは「林」に従う。ちなみに中国語翻訳では「林」となっている。
- (52) 李雲迪オフィシャルサイト、ユニバーサル・クラシック。
<http://www.universal-music.co.jp/classics/yundi/>if/main.htm
- (53) 中国語では「大学」はユニバーシティを、「学院」はカレッジを、それぞれ指す。「学院」を「学校」とするのはよろしくない。
- (54) 「馬」が姓だから当然「マー・スーツォン」となるはずである。
- (55) 数学が苦手で文学部へ進んだ私が言うべきことではないが、大人になつてから実は数学って面白いんだと気づくことはあり得る。今まで感動した本を挙げると言われて私がいれば紹介するのは、文学書でも何でもなく、講談社のブルーバックスから出ている相対性理論の解説書だったりする。それも数学を使わない概説書ではなく、ある程度数学を勉強しつつ読むようなものが非常に楽しい。数学がこんなに面白いなんて、高校時代に教えて欲しかった……。
- (56) 文部省著作兼発行『高等小学地理書附図』日本書籍株式会社翻刻発行、大正十五年